

加湿器導入による工場労働者の主観評価変化

○ 輿水ヒカル（公衆衛生院）、 析原 裕（九州芸工大）

目的 冬期には、気象条件や空調空間の拡大にともない、低湿度状態で過ごす時間が長くなる。低湿度は風邪やぜんそく、アトピー性皮膚炎といった疾患を悪化させるほか、静電気の発生の原因にもなり、居住環境、労働環境ともに問題が指摘されている。本研究では工場の勤務者に対して、加湿器を導入する前後に温湿度環境と体調の変化に関するアンケートを実施し、加湿器導入による影響を検討した。

方法 アンケートは1996年12月～1997年3月、関東地方の某工場の従業員のべ4500人に対して行われた。加湿器導入前から継続して調査を行い、また導入後は未導入環境の勤務者に対しても調査を行い、これらを比較検討した。質問項目は、温湿度環境に対する主観的評価および体調に関してであった。

結果 加湿器導入によって「せき」、「のどの痛み」、「肌の乾き」といった乾燥に起因するとされる身体の不調に関する項目の訴えは減少した。また「静電気感」も訴えが減少した。環境に対する評価は、「乾燥感」「不快感」といった項目で減少がみられた。

謝辞 本研究にご協力下さいました、池田耕一・国立公衆衛生院建築衛生学部長に深謝の意を表します。

文献 平賀他：集中暖房に伴う低湿度環境に対する超音波加湿器応用に関する臨床疫学的研究，日胸疾会誌，19(9)，1981。